

## 〈 1. 書評論文 〉

### 1-3. 近現代を歴史記述することの困難と可能性

野上元『戦争体験の社会学——「兵士」という文体』  
(弘文堂、2006)

笹部 建

#### はじめに

終戦から半世紀を経た1990年代後半以降、実体験者の減少傾向の加速から、戦争体験に関する議論はいつしか「体験」から「記憶」をめぐるものへと移行していった。本書はそのような現状のなかで、戦争と記憶の問題を、「戦争体験を書くこと」の条件——とりわけその文体 (style) に着目しながら、太平洋戦争における人々の体験を媒介とした、書物と戦争の関係を歴史社会的に考察している。そこで分析手法として選ばれる言説分析は、通常の歴史記述とは異なるものであり、それゆえ時に厳密な科学的思考と齟齬をきたす危険性を持つ。しかし本書においては、その可能性と意義が対象との連関から存分に引き出されている。

本稿では、そのような本書の視座を確認しながら、言説として近現代史を記述することの困難と可能性について考えてみたい。まずは本書の概説から (1 節)、言説分析の危険性とその意義 (2 節)、さらには言説分析が近い過去である近現代を記述する際の困難とその可能性 (3 節) について指摘した上で、本書の視座をどのように評者の研究関心に引きつけることができるか (4 節) が簡単に触れられることになるだろう。

#### 1 本書の構成

本書は問題の概観である「はじめに」を冒頭として、序章における課題・方法論の確定と、終章の結論とに挟まれた第1～3章の具体的な分析、という構成をとっている。

著者によれば、戦争を歴史社会的に主題とするとき、しばしば日常性をめぐる問題がその焦点として立ち現れてきた。戦争という非日常的な状況を分析するためには、むしろ日常の中の政治的なプロセスに注目しなければならない、といった議論などがそれである。こういった観点は一定の妥当性を持ちうるが、戦前と戦後の支配の連続性を主張するが故に、戦争そのものに孕まれる過剰さを曖昧

なままにしてしまう。戦争に向けた合理的な社会編成を分析の俎上へのせる戦時動員論などがその代表的なもので、そこでは先に述べた戦争の過剰さに加え、動員の後により大きな社会への影響が予想される「復員 demobilization」への視点が欠けてしまう。また従来の戦争体験論も、実体験者の当事者性を強調した文化の政治学や、戦争責任論との接続による安易なイデオロギー分析に留まるものが多かった。そして1990年代半ば以降の実体験者の死去の増加によって、「いかに記録するか」という問題から「いかに読むか」という問題へのシフト、つまり「戦争の記憶」論が登場する。しかしここでも「書かれたテキスト＝過去の記憶の反映」という図式は維持され、記憶そのものの社会性や歴史性の厚みは見逃される。これらの解決策として、著者は戦争体験の記憶が表象されたテキストの性質ではなく、その存在の条件、つまり如何にしてそれらが書き残されてきたのかを問う、新たな視座を提示するのである。

そして具体的な分析方法としては、言説分析という手法が選ばれる。それは戦争体験そのものが「当事者性」や「生の声」といったことが強調される、極めて言語的な現象だからであり、またこれまでの戦争研究が取りこぼしてきた戦時動員と復員の相互の過程を、言語の集積から同時に考察の対象とすることができるからである。

以上が本書の課題と方法の確定である。次に具体的な事例による議論を見ていこう。

第1章では日露戦争（1904～05年）から総力戦体制の構築、さらに太平洋戦争時（1937～45年）に至るまでの、軍部のコミュニケーションシステムの変容とその大衆化が語られる。

日露戦争時において森鷗外（1862～1922）が既にその戦場報告を詩歌の形式で表現し、他の従軍作家たちとの差異化を図ったことに先駆的に見られるのは、その後の戦争においては客観的な記述が不可能となり、誰もが当事者となる戦争、すなわち「総力戦」という状況の一端であった。第一次世界大戦において直接的な戦場となることがなかった日本は、総動員体制の構築のため、日露戦争の記憶を総力戦の原体験として軍部の情報統制に組み込みつつ、同時にそれまでは次なる戦争に備えるため軍部に独占的に継承されるべき知識の集積であった戦争体験を、「軍事学」の普及というかたちで社会へと展開していく。留学制度により海外の書物から大戦を把握し、またそれを元にした石原莞爾（1889～1949）を始めとする退役軍人らの著作・講演などによって「軍事思想や軍事科学の社会への持ち出し」（本書：99）が行われていくのである。

さらに1930年代のメディア技術の進展と教養主義の台頭により、「第一次世界大戦という総力戦が『読むこと』として経験され」ていく（本書：109）。太平洋戦争下において、戦場は読み解かれるべきテキストとなり、総力戦下の軍事郵便による手紙、または戦場で書かれる日記・遺書などにより、国家と内面が共に「書くこと」のなかで兵士＝国民たちに認識されるようになる、と著者は述べる。

続く第2章では太平洋戦争の復員を経て戦争体験が文学化し、「兵士＝作家」が誕生する模様が語られる。大田洋子、吉田満、武田泰淳、大岡昇平、原民喜らの一連の戦争文学の作家たちが、体験をテキスト化する際に独特の負荷を自らにかけ、同時にその負荷の痕跡をテキストの中に刻みつけていくような作品を遺していく様子が語られる。

例えば大岡昇平（1906～1988）は戦場で詩を口ずさみながら自らの状況を相対化するような内面の状態を可能にするのだが、そのように戦場において傍観者となることは、同時に戦争の当事者としての体験の位相を揺るがせ、またその当事者性は復員後「体験記」としての記述を経ることより大岡自身からさらに離れて行ってしまう。観察者・体験者・記述者という、それぞれの立場が重なりながらも微妙にズレてしまう中で、戦地で内面と共にあったはずの詩を否定的な媒介とすることによって、

大岡は戦争文学の作家となる。彼は友人であった中原中也（1907～1937）の詩を編集、伝記執筆などをして、詩を編集・批評する立場となり、それと「同じような無遠慮さで自らの体験した戦争を編集したり批評したりしながら物語ること」（本書：153）で自らの体験を記述していくのである。

第3章では、前章で検討された「戦争文学」という戦争と「書くこと」の関係が変容し、その後の戦争体験が体験記として書き残されていく状況、つまり現在の戦争体験における状況に至るまでが記述されていく。

戦争文学は復員後間もない期間、誰もが戦争体験者であった時に、書き手の自意識を強烈に駆動させ、作者性のもとに生みだされていったのだが、その後戦争ではなくそういった「戦争について書かれたもの」が乱立する時期になってしまえば、その有効性を失っていくようなものでもあった。

このような状況下で、大岡昇平は『レイテ戦記』（1967年）の執筆を開始する。一兵士の視点で書かれていたそれまでと違い、そこでは鳥瞰的視点が採用され、戦場の事実の全体を歴史学的に描くことが目指される。そうして1960年代後半には大岡が戦争文学の臨界点を示す一方で、様々な無名の書き手たちによる「戦争体験記」が出版されていく。1966年の『きけわだつみのこえ』の第2集の出版に伴い、全国で数多くの戦友会が結成され、戦争体験文集が次々と刊行される。

そして最終節では、著者が行った長野県下水郡栄村での戦争体験記をめぐるフィールドワークの結果が記される。1995年発行の『不戦の誓い 私たちの戦争体験記』成立の過程には、個々の執筆者を支え、その体験記を秩序づけていった様々な編集作業があった。また、それら体験記の中では軍隊内の生活などが「当たり前だったから、いまさら書く必要もない」ものして扱われ、輸送部隊や後方部隊の体験者は前線部隊に比するだけの華々しい体験を描くことができないという遠慮から、記述の内容を抑制するような場合もあった（本書：234）。戦争を体験していない世代に向けられた体験記であり、編集・出版側の意図は「記憶の継承」というものでありながら、個々の執筆者たちの想定する実際の読者は他の投稿者たちであり、そこには歴史的なコミュニケーションを半ば拒否するような性質が生まれてしまっていることが示されている。

以上が本書の構成・概説である。総じて、言説としての「戦争体験」の系譜が、総動員体制下における「軍事学」の成立とその大衆化（1章）から、復員下における「戦争文学」の誕生（2章）、そしてその後の1960年代半ば以降における「戦争文学」の終焉と「戦争体験記」の展開（3章）、というかたちで記述されている。平和運動の戦後的な言説として扱われてきた「戦争体験」をめぐる状況が、今現在において無数の無名の書き手たちによる「戦争体験記」としてあり、それが体験者にしか分からない「生の声」であることをわれわれは自明視するが、それは戦争と「書くこと」の関係から広く20世紀を見渡した場合、決して普遍的なものではない、ということが示されるのである。

次に、本書の評価に移りたい。以下では2つの論点を示されるのだが、まずは歴史記述としての言説分析について、次にその言説分析が近現代史を対象とする際の問題について論じる、という手順を取る。両者には独特の困難や危険性と同時に、他の方法や対象からは見えてこない意義や可能性が潜在していることを、著者は遂行的に示しており、そこが本稿における本書の評価する点に他ならない。

## 2 言説分析という手法

本書は既に先行する書評において、批判すべき点が以下のように述べられている。

評者が最も違和感を覚えるのは、本書全体に流れる、ある種のアドホックさである。すなわち、「任意の作家（書き手）の、任意のテキストの分析を行い、その固有性（あるいは代表性）に依って論じていく」という作法のことである。（中略）さらには、このアドホックさは、ややもすると所謂「テキスト（内容）分析」的な印象を招き寄せかねない。（塚田 2007: 143、傍点原文ママ）

評者はこの「アドホックである」という指摘に、ある程度までは同意するが、その内実はここで述べられているような「テキスト（内容）分析」的な印象を呼び起こす、というようなものではない。本書の「アドホックさ」に関する指摘は次節で述べるとして、まずは本書における「言説分析」という手法とその意義について見ていこう。

M. フーコーの考古学／系譜学的歴史記述の表現として生み出された言説分析において、選択される対象は「そのような言語表現や思考が特定の年代において少なくとも可能であったことの証拠ではあるけれども、その時代の平均でも代表でもない」（野上 2010: 636-7、傍点原文）。例えばフーコーの『言葉と物』における記述はボルヘスの小説やベラスケスの絵画から始まるが（Foucault 1966=2000）、それらの記述の対象がその時代の知のありよう（エピステーメー）の代表・平均なのではない。むしろそれらは「奇妙なものや極端なもの」であり、「その時代の思考や表現の条件やリミットを探ろうとするもの」となる。また、言説分析で扱われる対象が個々バラバラに扱われ、無秩序であるならば、そもそも有意義な歴史記述は成り立たないだろう。それぞれの対象の連関はその分析過程で明らかにすべき「現在」の地点への批判的視座によって成り立つ。「系譜学の記述の企ては、何に取り組みそれを転倒させようとしているのかという問題意識と密接な関係をもっている」のである（野上 2010: 637）。

言説分析の単位となる「言説」や「言表」といったものは、本来は文学研究における「テキスト」や、知識社会学における「知識」といったものとは異なるものである。「テキスト」とは作者（語り手）の設定した主題や読み手の解釈（あるいはそれらを規定している社会状況）などに到達するために抽出される分析単位であり、「知識」もまた社会的な階級や権力構造を解き明かすための単位である。言説分析においてはこのような分析における実定的な単位を設定しない（佐藤 2006）。それゆえ言説分析それ自体もまた言説の1つとして扱われることになる。文学研究における一次資料と二次資料の区別はおろか、自らの記述ですら1つの出来事として捉えてしまう。だからこそ、記述において「現在」の地点への批判的視座が決定的に重要となり、それがなければ実証性も革新性もない散逸な文章の羅列となる可能性がある。言説分析とは、そのような「反-方法」とでも言うべき危険性を持った分析手法なのである。

では本書の記述における「現在」への批判的視座とは何か。この点に関しては、近年の戦争体験に関する「語り」を対象とする他の文献と比較してみると明らかとなる。たとえば成田龍一の『戦争経験の戦後史』は、「戦争体験」ではなく「戦争経験」という言葉を使用し、個別具体的な「体験」を共有可能な「経験」としていくことが戦後思想の前提であったという藤田省三の議論を引き、戦後社会における戦争経験の時期を体験（1945～）／証言（1965～）／記憶（1990～）の時代、という3つに区分する。現在盛んに論じられている「戦争の記憶」論と従来から問題にされてきた「戦争体験」論の双方を歴史的に相対化するため、新たに「証言」の時代という区分を設定し、それぞれの時期の語りの変容過程を丹念に追いかけてながら、総体としての戦後社会を規定する「戦争経験」という新たな視座を提示している（成田 2010）。

また、福間良明の『「戦争体験」の戦後史』は、藤田が述べるような「経験としての戦争」それ自体

が戦後社会において「教養」として受け止められ、戦中派世代と戦後派・戦無派世代の対立として焦点化されてきたことを、『きけわだつみのこえ』を中心とする、記憶の継承運動を軸に考察している。戦争の記憶を戦後社会の遺産として共有していこうとすればするほど「戦争を知らない世代」の反感が生まれ、さらには戦中派においても、あくまで戦争体験の語り難さにこだわる安田武のような論者もいて、その後の反戦運動と戦争体験論における断絶が広がっていく様子が記述されている（福岡2009）。

両者は「～の戦後史」というかたちで、戦争における「語り」の歴史の変容を緻密な記述によって展開している点で共通している。しかし本書においては、両者が対象の枠組みとして設定している「戦後社会」そのものを「総力戦」という位相の理論的・歴史的把握から相対化する視点を持ち得ている。すなわち現在の言説としての「戦争体験」の起源を、日露戦争の記憶と第一次世界大戦の情報を基にした、総動員体制を構築する軍部の情報統制に求め、現在の「戦争体験」の性質がアジア・太平洋戦争という総力戦の結果生まれたものであったことを指摘している点、ここに本書のオリジナリティがあると見えよう。現在の「体験した者にしか分からない」といった、社会的な記憶に対する否定的な性質を持った「戦争体験」の系譜を遡れば、まずは軍事官僚たちの情報統制の継承を司るものであったことが指摘されるのである。

そして動員だけでなくその後の復員の過程において、今度は言説としての「戦争体験」は軍事制度から文学という芸術の制度の中に入り込むことによって、「兵士＝作家」である戦争文学者たちを生みだしていく。このような議論展開は、いわゆるテキストの内容分析のような解釈的なアプローチというよりも、むしろ優れて制度的なアプローチでもあり、さらには「戦後社会」という時間的枠組みの中で「戦争体験」に関するテキストの変容過程やその要因を丹念に追う、他の歴史分析とも異なる点である。それぞれの章における極端とも言える記述の変化が、より広いパースペクティブを可能にし、そこから通常の歴史分析では見えてこない側面、すなわち言説としての「戦争体験」の系譜を炙り出す。このような戦略的な記述によって、本書は日露戦争や第一次世界大戦との連続性を捉えることで、アジア・太平洋戦争という総力戦の特殊性を浮かび上がらせているのである。

「戦後社会」そのものを条件付けていた総力戦への視座、そしてそこから得られる現在の「戦争体験」の性質の相対性の指摘、これらの点において本書は考古学／系譜学的な言説分析として見事に結実していると言えよう。

### 3 近現代史の歴史記述

さらに本書は、単に言説分析を遂行しているというだけではなく、それが現在から時間的に近い過去を対象として記述する際の問題に自覚的であり、その点においても評価されるべきであろう。ただし、そこには前節で見たような言説分析の困難とは違った意味での危険性も内在している。以下では言説としての近現代史を考える際の主な論点を、著者の議論に依りつつ次の3点に帰せてその独自性をみていく（野上1997）。

第1に、記述する時代が現在から近ければ近いほどそれに関する言説は増加し、歴史学の一般的な方法論の前提である「歴史的資料の希少性」が成り立ちにくい。様々なメディアを通じた情報の氾濫が常態化している現在において、そもそも取り上げる言説がどれほど価値のあるものなのかを見極めるのは難しい。言いかえれば、「資料を資料として区別する公準があまりに不明確なのである」（野上

前掲：95)。

第2に、それらが語る主体の位置に近似するが故に、半ば強制的に記者の政治的立場が問われるケースが多い。フーコーが歴史記述において設けた「考古学的切斷」<sup>1</sup>が通用しないのである。この点をむしろ社会構築主義的に応用して、それまでの文書中心主義的な実証史観を批判したのが例えば上野千鶴子の言説実践であった(上野1998など)。しかし全てを政治性に回収してしまうことは分析の平板化に繋がるばかりか、政治性を付与された対象の存続可能性すら危ぶまれてしまう。

例えば上の2点に関して自覚的に取り組んだ言説分析を行っているのは小熊英二だろう。彼の『1968』は1960年代後半の学生運動の展開を追ったものだが、上下巻合わせて原稿用紙6000枚を越える大著として刊行されている。この膨大な記述はそれ自体が方法論的な戦略であり、知識人をはじめ学生の書いたビラや檄文などの多種類かつ大量の文書資料を記述の中に取り込むことにより、対象の言説空間の全体への漸近を目指している(小熊2009)。

けれども、ここで第3の論点と関わるのだが、この著作に関してはいわゆる「当事者」たちから既に批判があり、例えば当時高校生だった四方田犬彦は小熊の記述にインタビューが使用されていないことを「マイクを突きつけた瞬間にブン殴られるのが怖かったのだろう」(四方田2010: 34)と貶す。また当時東大生だった福岡安則もこの小熊の著作を「(当事者として)ガッカリだった」とコメントし、小熊の当時の若者に対する記述を「サイドが『オリエンタリズム』で示した<他者化>の手口だ」という(福岡2011: 132)。

両者の批判の内容よりも、そこで「当事者による実体験」が強調されている点が重要である。メディア化された資料ではない体験に基づく情報の特権化、という問題がここには表れている。小熊の系譜学的視点は、そもそも「当事者主権」的な歴史観とは別の試みとしてあったはずが、単に「小熊は『1968』を体験しなかった＝当事者ではなかった」という点で批難されてしまうのである<sup>2</sup>。

以上に見てきた言説としての近現代史を考える上での3つの論点、資料の希少性の減少、記者の政治的立場の顕在化、「体験者」による情報の特権性に対し、本書において著者はどのように取り組んでいると言えるだろうか。

著者はこれらの問題を、「戦争体験」が「戦争体験記」に変容する瞬間、言いかえれば近い過去が歴史化される地点を捉えようとすることによって問い直している。本書第3章の最終節がフィールドワークに当てられている理由がそこにある。これは「小熊英二は聞き取り調査をしていないが著者はしている、故に評価できる」などといった単純な議論ではない。著者がそこで2つの言説が媒介される瞬間、つまり戦争体験についての記憶がテキスト化される際に、どのように社会的な拘束力が働くのかを見ようとしている点が重要なのである。著者が調査した長野県栄村における戦争体験記の出版までの過程には、体験記を編集・出版する側の「記憶の継承」という目的や秩序化への志向と、個々の体験者たちのリテラシーや執筆の動機がズレ合いながらテキスト化されていく様子があった。著者はこういった遺された資料の内容を政治性に回収したり、あるいはそこに体験者の「実感」や「生の声」が書きこまれているとだけ解釈したりするのではなく、それがテキスト化される瞬間において、

1 研究の対象である言説とその権力作用を分析する研究者自身の言説が同列に並ばないような時間的落差のこと(橋爪2006: 194)。

2 小熊の『1968』が刊行された前年は、雑誌『ロスジェネ』の創刊などに代表される若年労働を問題とした言説が活性化した時期だった。そういった状況下で学生の政治運動として神話化されている1968年の様相を記述し、1968年と2008年の若者を比較検討することに小熊の眼目はあったはずなのだが(小熊2009: 845-66)、そうした観点は四方田にも福岡にもない。

どのように条件付けられていたのか、という点についての考察を欠かさない。本書第1章では「軍事学」の大衆化において退役軍人たちの「有名性」が、第2章では「戦争文学」の誕生において作家たちの「作者性」が、そして第3章では有名性も作者性も伴わない「無名性」の「戦争体験記」の広がりがあり、それぞれ述べられていた。そして最終節のフィールドワークでは、「戦争体験記」において個々の書き手たちの（無名ではあっても匿名ではない）「顔の見える関係」という性質の結果生じる、記述の拘束性が指摘されるのである。

以上が本書の評価となる。要約すれば、本書は個々の歴史資料の代表性によってではなく、記者の依って立つ現在への批判的視座から出発する特殊な歴史学的手法である言説分析を採用しつつ、それが近現代を対象とする際の臨界点、すなわち近い過去が歴史化する瞬間を媒介している社会的条件への視座を備えており、それが本稿において方法論的に評価する点であった。言説としての「戦争体験」が「戦争の記憶」論へと移行しつつあるという現状認識から始まり、そもそもの「戦争体験」それ自体が「戦後社会」という総力戦の結果である特殊な社会状況によって生み出された言説であることが示され、さらにはそれがテキスト化される際の媒介性が捉えられる。個人の「実体験」や「証言」を特権化してその立場を政治性に回収するのではなく、かといって文書資料の字義通りの解釈のみで事足りれりとするのでもなく、前者が後者になる瞬間、体験を「書くこと」とはどういうことなのか、という問題意識から記述を出発させている点。これが著者の独自性であり、評者が本書において評価するもうひとつの点である。

とはいえ、この本書における評価は両義性を含んだものとならざるを得ない。というのも、最終節のフィールドワークによって、本書は記述における時間的な空白を作り出してしまっている。端的に言ってしまうと、1960年代後半から、フィールドワークが記述される1990年代後半以前までの記述が本書においては希薄なのである。著者は「あとがき」のなかで「一読してわかる通り、本書の第3章の第2節と第3節のあいだには記述や方法意識上の分断線が入っている。もちろん、そのことはよく考えられてのことである」（本書：271）と書いており、そこには「方法論的な乖離」があるように読めるが、むしろここで問題なのは「時間的な乖離」なのではないか。1960年代後半以降も、戦争と「書くこと」の関係はそれなりの歴史の変容があったはずであり、そこを論じることなく1990年代後半以降のフィールドワークに直結させてしまっているため、記述のなかに違和感を生じさせてしまっている。もし「アドホック」という表現を使うのなら、この点こそ指摘されるべきだろう。

## おわりに

「書評」というよりも、むしろ「解説」といった方が相応しいようなかたちになってしまったが、最後に評者の研究関心から本書における視座をどのように応用できるかについての若干の考察を展開して、論を閉じることとしよう。

評者の研究関心は戦後の日本における大衆文化だが、その中でもとりわけ1960年代のサブカルチャーが主な領域である。

著者が述べる「戦争体験論」から「戦争の記憶論」への移行期である1990年代後半は、最後の徴兵検査を受けた1926年（大正15、昭和元年）生まれの世代が寿命を迎え始める時期であった。それゆえ戦争の「実体験者」の物理的な喪失、という状況を著者は本書における問題の出発点として設定したことは先に述べた。

その後10数年を経た現在においては、1930年代生まれの世代の実質的な寿命期が訪れていると考えられる。小説家の小田実（1932～2007）、建築家の黒川紀章（1934～2007）、劇作家の井上ひさし（1934～2010）、SF小説の大家である小松左京（1931～2011）、落語家の立川談志（1936～2011）などの、近年における1930年代生まれの有名人の相次ぐ死は、例えばスティーブ・ジョブスなどの他の有名人の死とは、異なる意味を持つ。

1976年1月の『読売新聞』に鶴見俊輔は「裏通りの文化から表通りの文化へ」と題した文章を寄せており、「昔からのそれぞれの地域の日常生活の習慣に根ざす文化」として「裏通りの文化」を特徴づけ、その代表例を野坂昭如（1930～）・寺山修司（1935～1983）・五木寛之（1932～）・井上ひさしに求めている（『読売新聞』1976.1.12夕刊）。これら1930年代生まれの作家は敗戦直後の混乱の中で少年期を送った者たちであり、その状況の特殊性ゆえに通常の大衆文化とは異質なものを生みだしていった、という議論が展開され、鶴見はその「裏通りの文化」を「サブ・カルチャー」とも呼びかえる。

本書でも取り上げられていた石原慎太郎（1932～）や野坂昭如、開高健（1930～1989）などの作家たちは、上の世代の「戦争体験」に対する拘泥を批判しながらマスメディアに露出していき、下の世代の若者たちのオピニオン・リーダーとして活躍していった。無論それらは作家たち全ての共通項ではなく、開高や大江健三郎（1935～）などのように、先行世代の戦争体験や被爆体験による語りを受け止める作家たちもいる一方で、野坂のようにマスメディアの中で自らの「戦災孤児」というイメージを積極的に作り上げていくような者もいた（清水 1995）。

このような世代の実質的な寿命期が近づいているということは、「戦後社会」におけるサブカルチャーそのものが近い過去から歴史へと変容することを示している。また、そこには言説としての「戦争体験」を否定することによって、自らの世代やサブカルチャーを積極的に展開していく過程があったのであり、それこそ本書で論じられることになかった、1960年代後半以降の、戦争と「書くこと」をめぐる歴史の変容をつかむための糸口になると思われる。

本書では詳しく論じられてはいなかったが、著者は別のところで「戦後社会」という時代区分もまた「冷戦」という新たな戦争の最中の時代であったとして、本書での議論を拡張し、その展開を試みている（野上 2010）。「冷戦」というのは構造としては当事者として埋め込まれながら、戦争そのものの体験性を実感することが困難な戦争でもあり、そこでは核兵器による壊滅の「予感」だけが人々の想像力を支配するような状況を作り出して、「体験することが不可能であることこそがその経験の条件のすべて」になっている、と著者は書いている（野上 2003: 197、傍点原文）。そしてそのような「予感」の想像力を成り立たせるのが、戦後の新たなメディアであるテレビというわけなのだが、そこで本書において「戦争文学」を成り立たせていた「兵士＝作家」に代わる、どのような文体が発見されるかは、まだ評者には見えていない。けれども、そこで扱われる対象が近い過去である限り、本稿で見てきたような困難性がそれらを記述する際の課題として現れてくるだろう。その対象に言説分析という手法を当てはめるかどうかはまた別の問題ではあるが、それらは社会の歴史的な様相を記述する際の問題意識をどのように記者自身が発覚しているかに関わっており、その際の方法論的な構えのようなものを、評者は本書から大きく受け取ったと思う。著者のようなアクロバティックな議論やセンスを真似るだけの技量も準備もないが、「戦争体験」だけでなく「戦後社会」における様々な記憶や体験が今後とも失われていく以上、そこに対する想像力だけは失うべきではない。そしてそれが近現代史を歴史的に記述する際の賭け金となるのだと学んだことが、四苦八苦しつつもその記述の切れ味に感嘆しながら読んだ、本書に対する評者の収穫であった。

【参考文献】

- Foucault, Michel, 1966, *Les mots et les choses: Une archeologie des sciences humaines*. (=2000、渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物』新潮社。)
- 福岡良明、2009、『「戦争体験」の戦後史——世代・教養・イデオロギー』中央公論社。
- 福岡安則、2011、「書評：小熊英二『1968』上下」『社会学評論』62(1): 131-32。
- 橋爪大三郎、2006、「知識社会学と言説分析」佐藤俊樹・友枝敏雄編『社会学のアクチュアリティ5 言説分析の可能性——社会学的方法の迷宮から』東信堂、183-204。
- 成田龍一、2010、『「戦争経験」の戦後史——語られた体験／証言／記憶』岩波書店。
- 野上元、1997、「言説としての『近現代史』——『戦時期日本社会』に対する歴史記述と歴史資料」『東京大学社会学情報研究所紀要』54: 89-109。
- 、2003、「戦争体験における視線と文体——観察者問題からみた原爆文学について」『日本女子大学紀要』13: 21-31。
- 、2003、「原民喜、以後——あるいは、<メディア>として原子爆弾を考えることの(不)可能性」『現代思想』31(10): 104-18。
- 、2005、「あさま山荘事件と『戦争』の変容——『メディア論』の現代史のために」北田暁大・野上元・水溜真由美編『カルチュラル・ポリティクス1960/1970』せりか書房、92-113。
- 、2010、『「戦後」意識と『昭和』の歴史化』『マス・コミュニケーション研究』76: 105-16。
- 、2010、「考古学・系譜学」日本社会学会編『社会学事典』丸善、636-37。
- 小熊英二、2009、『1968上下』、新曜社。
- 佐藤俊樹、2006、「関のありか——言説分析と『実証性』」佐藤俊樹・友枝敏雄編『社会学のアクチュアリティ5 言説分析の可能性——社会学的方法の迷宮から』東信堂、3-25。
- 清水節治、1995、『戦災孤児の神話・野坂昭如+戦後の作家たち』教育出版センター。
- 高井昌史、2011、『「反戦」と「好戦」のポップ・カルチャー——メディア／ジェンダー／ツーリズム』人文書院。
- 塚田修一、2007、「書評：野上元著『戦争体験の社会学——「兵士」という文体』」『慶応義塾大学社会学研究紀要』64: 139-44。
- 上野千鶴子、1998、『ナショナリズムとジェンダー』青土社。
- 上野千鶴子編、2001、『構築主義とは何か』勁草書房。
- 四方田犬彦・平沢剛編、2010、『1968年文化論』毎日新聞社。

(ささべ・たける 博士課程前期課程)